

子供への認識とそのずれ

中島信子

七歳の少女の記憶の良さと、観察力から少女を拉致した二人の男と少女を監禁した場所が、即特定された事件があった。この少女の落ち着いた判断力には事件当時、多くの大人が驚かされた。が、実は中世ヨーロッパではまさに、子供は七歳から大人とみなされ、親から離されても生きていける年齢とされていた。しかも、この時代の大人達は、子供の記憶力は大人より勝っていると理解さえしていた。

土地の境界線等、記録として残さなければならぬような大事な事の決定には、その子供の記憶の良さを利用した。子供を境界線に立たせ、いきなりなぐりつける。すると子供は痛みと恐怖から、その場所を生涯忘れない

で成長していく。また、してはいけないことの認識のために絞首刑を見学させもした。

絞首台は、町や村が、自分で裁判ができるという自治の確立の誇りとして、町や村の入口にあった。幼児でさえ、罪人が吊され朽ちていく光景を日常の一風景として見ていた。大人達は子供を身体の小さな人位の意識で見ているように、子供服などという特別な服もなく、デザインは大人服と同じで、サイズだけが違った。この意識が産業革命後の子供の権利確立の大きな原動力になっている。

さて、七歳に戻るが、実はディズニー映画でおなじみの『白雪姫』も一八一二年にグリム兄弟が初出版した際の話では七歳になっている。(初版グリム童話集2吉原高志・素子

訳・白水社)この版では、継母も実母であり実母は七歳の娘の美しさに嫉妬し、まず森で猟師に殺害を命じる。

七歳は現在の日本では小学一年生。かわいと思えこそすれ、美しさに嫉妬することはまずないだろう。しかし、中世ヨーロッパでは、大人と見なされたのだからこの実母の感情があつても不思議ではない。ところが、ディズニー映画の『白雪姫』はどう見ても大人の女性で描かれている。大人の女性が魔法使いの単純な芝居に三回も騙される。観る側にとっては何とも納得できないストーリーとなる。ディズニー映画は、この辺りの年齢的処理をうまくしなかった。

しかし、初版の七歳の『白雪姫』なら、三

回の騙されも納得できる。この年齢の少女が、一日中深い森の中にひとりぼっちでいたとしたら、魔法使いでも何でも招き入れてしまつたらう。いくら大人と見なされる年齢でも、七歳は七歳である。前述のしつかり者の少女も、解放され、おかあさんの胸に飛び込んだ時は、全身で喜びを表わしていた。

この同じ『白雪姫』の七人の小人だが、諸説いろいろあるが、私は、小人も子供達ではと思つている。グリム童話の原形が流布した時代には、貧困層の子供は、五歳ぐらいで炭坑労働に出された。狭い坑道は身体が小さければ小さい程都合がよく、子供達は大人に叱咤されながら、奥へ奥へと追いやられていた。

陽も射さず、粉塵の舞う中で、重い石炭をかっげば骨の成長も止まる。肺もやられ、多くの子が短命だった。が、もし仮りにそれなりの年齢になつても、身体は平均よりはるかに小さく小人そのものだったはずである。『白雪姫』の七人の小人は、老婆(魔法使い)に騙された姫にさす。大人に騙されるなどいうのである。という事は姫より人生経験があり、知恵も働いている。少なくとも七歳の姫より、意識は大人である。こう考えると、

十歳、十二歳の少年達が助け合い、森の中に自分達で家を築いたのではないだろうか。そこへ『白雪姫』がやってきたとしたら！

どちらにしろ、この時代、子供が生きていくのが大変だった。子供どころか、女も短命で、出産で亡くなる者も多かった。自然、継母も多かつたことになる。

日本でも、中世の一般庶民の暮しは厳しく墮胎や子供売りもあつた。ところが、どこが違つたのか、子供に対する認識が大きく違い、子供の権利の獲得は、ヨーロッパのそれとは懸け離れている。

事件の重要な証拠を、七歳の少女の意見から固めていったなど、はじめてではないだろうか。

子供は口を出すな・子供っぽい・子供のくせに・子供は半人前と、あい変らずに子供を蔑視する言ひ方は、メディアを中心に飛び交つている。石原慎太郎東京都知事が、自分の意に添わない質問を記者がするとすぐに激昂する。この激高ぶりを「子供っぽい」と形容していたが、子供は、石原慎太郎のように、横柄で嫌味な態度はとらない。もっと謙虚であり思慮深い。

どうも現代社会を見ると、大人より子

供の方のがよほど大人なのである。いや、ずっと子供は大人より大人なのではないだろうか。

例えば、我が子虐待にしろ、やられた子は決して親がやったとは言わず、むしろ親を庇う。回りの大人や教師等の人格を見抜く力を、五、六歳ですでに持っている。わがままさえも言つて良い時と悪い時を心得ている。それが、成長するに従つて、ある意味での理性を欠いていくのではないだろうか。

信号を無視しはじめ、つばを吐き、人の物を盗み、うそぶく事を覚えていく。そして、石原慎太郎のように権力を我が物顔でふりまわすようになっていく。

日本は、子供の権利条約を批准しながら、子供への認識はずれたまま、それこそ大人達が、大人になれずに幼稚なまま国を動かしている。

七歳の子のすべてを認めてみてはと言わないが、少なくとも、七歳とはどういう年齢なのかをきちんと理解すべきと思う。男女七歳にして席を同じうせずという『礼記』の一句は中世ヨーロッパの意識と通じるはずである。